

ふるさとへの想い——いまも消えることなく

◎小林芳正

第8回・1982年受賞。主婦中心の稲作技術の普及、独自のふるさと運動の展開など、山間地の農協営農指導活動

身に余る山崎農業賞をいただいたのは昭和57年(1982)6月27日のことでした。受賞式ではじめてお会いした山崎不二夫先生の柔和な印象がいまも私の胸に残っています。

受賞の対象になったのが主婦農業、地域に適合した稲作技術の確立、独自のふるさと運動の展開でした。米の減反政策が施行されると村の農業形態は兼業化が急速に進行しました。男性が農外に就労、主婦が農業を守るというかたちでの進行でした。主婦は主人の指示での労務担当でした。

農協では主婦のやり甲斐と生き甲斐を構築したいと、冬季に主婦の稲作講座を日曜日に開設しました。お母さんたちは弁当持参で受講、それが昭和50年まで続き、昭和51年の冷害を乗り越えお母さんたちは全国から注目を集めました。

福島県熱塩加納村農協は「兼業でもいい、みんなが農業を営んでいる村」を目指し、兼業であっても適応できる技術の確立に力を注いできました。一方、独自のふるさと運動を展開、「住むに値する村」づくりを進めてきました。

熱塩加納における受賞後の主な活動と今、全力を傾注している事項についてご報告いたします。

昭和55年(1980)から取り組んだ有機農業運動

食べ物はずまさにいのち、いのちの糧を生産する農業はいのちの産業との考えから有機農

業の里づくりを目指した有機農業の運動に取り組み、今年で34年になります。その間幾度も冷害、いもち病多発年次に遭遇、それを乗り越えての継続でした。

有機農業の提携における基本理念は「生産者は都市生活者のいのちに責任を持ち、都市生活者は生産者の暮らしに責任を持つ」関係です。これは、日本の有機農業運動の提唱者である一楽照雄氏の言葉ですが、間に流通業者(米穀商等)が入ると平等の論理が崩壊する恐れがあります。熱塩加納村のように農協主導型で進められてきた有機農業は面としての活動成果はあっても、提携を成立させるには問題を残しました。

有機農業から生まれた身土不二の学校給食

平成元年(1989)から村内産の化学農薬1回のみ無化学肥料栽培の米と有機栽培野菜による学校給食がスタートしました。食材の地域内自給を目標に約25人の「まごころ野菜の会」の会員が毎朝、共同調理場に届けています。かけ甲斐のない家族のために有機栽培の自給野菜を多目に作付けし、給食食材に活用しますが、そこには経済行為は介在していません。次の世代を担う児童・生徒のための給食であり、安全・安心は当然のことで、身土不二に加えて旬産旬食を基本とした給食です。できれば、旨味と物語のある給食にしたいと年2回、勉強会を開いています。

熱塩小学校農業科の支援員に 生き甲斐を求めて

今年の誕生日には、私は傘寿を迎えます。わが家は小さいながら農家です。息子は会社勤めをしながら認定農業者として稲作を、妻は昨年まで仲間と直売所を開いていましたが、高齢者だけでは継続できずに閉鎖し、好きな野菜栽培を続けながら、仲間と農産加工(漬物)に取り組んでいます。

私は、イネの日常管理と学校給食のまごころ野菜を育て、共同調理場に届けています。いま一番力を注いでいるのが、小学校の農業関係支援員というボランティアです。お世話になった熱塩加納へのささやかな恩返しです。

喜多方市は平成19年から小学校に農業科を設置、現在は全小学校(17校)で実施しています。農業科の対象は3～6年生ですが熱塩小学校では全校生での取り組みです。水田が10アール(コシヒカリ5アール、こがねもち5アール)、畑は13アールでバレイショ、トウモロコシ、カボチャ(私が育成中の長カボチャかんどう)、サツマイモ、秋野菜のダイコン、カブ、ネギ、ほかにダイズとアズキを育てています。すべて無化学農薬、無化学肥料の有機栽培です。

熱塩小学校の農業科では技術的なことは伝えていません。農協職員時代から農業は大きな教育力を内包していると考え、平成元年(熱塩小は平成4年)に学校田を設置(会北中学校にも設置)、有機栽培の稲作に取り組んできました。熱塩小の児童たちは、会北中学校まで9年間農業体験をとうして様々なことを学びます。

熱塩小の農業科は土を耕し心を耕すことを基本に、農や食に対する謙虚さや、自然に対する畏敬の念を養い、感性豊かな子どもたち

の成長を願っての取り組みです。東京農大初代学長・横井時敬博士の残された「稲のことは稲に聴け、田のことは田に聴け」を信条に「作る」という言葉を使っていません。「人がどんなに努力しても米一粒たりとも作れないんだよ、米を作るのはイネなんだよ、米がいっぱい実らせるイネに育つよう手助けするのが人の役割なんだよ」と子どもたちには説いています。

また、有機栽培については熱塩加納地区は昭和55年(1980)から有機農業の里づくりに取り組んでいることもあっての実践です。有機農業は、農薬を使用しないだけにリスクも大きく、多くの人手を要し、安全・安心な食べ物を確保するには容易でないことを子どもたちに知ってほしいと願っています。農業科に携わる教師、支援員、保護者など、大人たちが子どもたちの心の中にどのような種をまくかです。5年、10年、20年かけて育てるのは子どもたちです。

熱塩加納の人たちは平成18年、喜多方市との合併で「ふるさと」を失ってしまいました。「ふるさと」を回帰するために「ふるさと」を考える会の設立を計画しております。

終わりに、山崎賞に推薦していただきました当時の県農業短大・西山先生はじめ、諸先生方に厚く御礼申し上げます。



2010年福島県喜多方市で行なわれた現地研究会に駆けつけてくださった小林氏